

アスマン、アライダ『記憶の中の歴史 個人的経験から公的演出へ』磯崎康太郎訳、松籟社、2007、2011。

- ・文学史家カール・ハインツ・ボーラー曰く「ドイツ紙の抹消が無意識のうちに、ユダヤ民族の抹消に対する罪滅ぼしの供え物になっている」（28）
- ・社会学者カール・マンハイムによる世代研究のための理論、「この論文では、年代への帰属を表している経験上・統計上の日付が、経験は集団的に加工され、この集団的な加工は歴史的に段階付けられるという理論に結び付けられている。マンハイムが言うところの「世代の関係」というのは、歴史上の決定的な共通経験、社会性を身に着けるモデルの同質性、共有された価値体系に基づくものである」（52）
- ・二十世紀にドイツにおいて決定的に重要な世代、45年世代、68年世代、そして両者の関係とその前後が、著者の関心の一つ
- ・68年世代は、追放者や亡命者ドルノ、ホルクハイマー、マルクーゼあるいはマルクスやエンゲルス、フロイトやベンヤミン、フーコー、ラカンらに自らの知的源泉を求めた。彼らは自らの親の世代33年世代との対立についてよく論じられた。
- ・45年世代「懷疑的な世代」について2000年代初頭は、彼らのナチ青年団時代の活動への批判的注目が集まっていた。
- ・45年世代のプロフィールが下地となってそれに続く68年世代がそこから対照的に展開していった。第一に政治性、脱政治化された懷疑的な青少年のうちに政治化された青少年が続く。第二に青春時代、大戦によって失われた青春時代と強調され永続化される青春時代。それ第三に歴史との断絶、懷疑的世代にとって45年の断絶が経験される一方、68年世代には国家社会主義は意識下に潜在的に存在し続けていた。前者には憤りが欠け、後者には激昂が準備されていた。（70-72）
- ・大戦の参加へは若すぎた45年世代に加害者性は問題視されず、彼らの変化への欲望がひとつ特徴としてあった。
- ・忘却と想起（88）
- ・68年世代のあとにつけられた区切りは、父親と息子の間の断絶によってではなく、接近して相前後する二つの世代、つまり68年世代と78世代の反目によって生じたものである。長い間、68年世代と足並みをそろえて進んできた78年世代は、68年世代からその責を奪い自らのアイデンティティを版68年世代、ポスト68年世代と定めた（90-91）
- ・20世紀における世代の見取り図、七つの世代。1、14年世代、第一次世界大戦の世代、1880年から95年ドイツ帝国生まれ、青少年運動の担い手、ワイマール共和国への期待と失望、国家社会主義への準備。2、33年世代、第二次世界大戦の世代、1900年から20年ドイツ帝国まれ、大戦に参加、68年世代の親となる。3、45年世代、懷疑的な世代、1926年から29年生まれ、幼年期と青年期をヒトラー青年団で活動、45年以降の抜本的な再出発を決める。4、戦時の子供たち、1930年から45年生まれ、2000年代初頭に学術的、主題的関心

を集め始めている。5、68年世代、1940年から50年生まれ、親たちへの反発の世代、6、78年世代、1950年から60年生まれ、68年世代の地ならしの上を歩いたのちに多くが、前世代に背を向けた、道徳的思考様式から実用的あるいは新保守主義的な死を鶴への方向転換という形である。7、85年世代、およそ1965年から80年生まれ、諸々の世界規模の変動を受けて育ち、68年世代の子供として戦争の被害が及ぼすに育った最初の世代であり、道徳や憂鬱より快楽主義や自己中心的な無関心を公然と表明する。

・85年世代について、例えばクリスティアン・シューレは当世代を、思春期にデジタル化の時代を迎える、メディアやビジュアルを通じた世界観を持ち、歴史上の決定的な体験はエイズ、エルノブイリ、ベレストロイカ、壁の崩壊である。その根底は、あらゆることがついでつする複数主義がある。そして過去およびその想起の試みは、個人的な感情から切り離されはしているが、ヒトラー、アウシュヴィッツ、ショアは文化的、個人的自己理解の消すことのできない構成要素でもある。（106-107）

・70、80年代にもてはやされた西ドイツの文学ジャンル「父親文学」だった。父親文学のテキストでは、生物学上の父親からの離反が問題となり、これは心の父親探しにつながることが多い。1990年代になり、世界大戦やホロコーストとの時代的な隔たりが大きくなるにつれて、父親文学に代わるジャンルとして、世代か、家族かを扱った長編小説が登場し、その活況ぶりはミレニアム転換後も続いている。この二つのジャンルに共通する主題は、架空の、または自伝的な自我への商店かであり、自分の家族やドイツ紙に向き合う、彼・彼女のアイデンティティの確認となる。とはいっても、こうした自己確認の形式は、この二つのジャンルにおいて極端なまでにかけ離れている。父親文学では個人主義や断絶を特徴とした——テーマの忠臣は、父親との対立、論争、清算だった——のに対して、家族小説はむしろ連續性を特徴とする。家族小説では、自らの自我をより大きな家族の脈絡、歴史の脈絡に統合させることが問題となる。家族小説の場合、書き手のアイデンティティ探しは歴史的な深みと多様性を獲得するが、このことは、記録や文書などの資料の渉猟による混淆的なテキストにもみられる。父親文学では、国家社会主義との対決は外在化され、家族小説にはそれを内面化しようとする態度がある。（117-121）

・ダグマール・ロイポルト『戦後』、彼女は娘としてと同時にドイツ文学者・歴史学者として、父の死後父のテキストを会社騎士、書庫の中で資料を研究する。父親文学のように過程のきずなが引き裂かれるではなく、親密な場面を通じて再びきずなが結ばれる。父の存命時には実現しなかった対話が想起の形により、父の日記や数点の文学上の試作品を読むことにより、また資料研究により、遅ればせに取り戻される。書くことそのものが人生の岐路器として不可欠な自己確認の作業を媒介することになる。（122）

・シュテファン・ヴァクヴィツ『目に見えない国』では、第一次世界大戦を構成した人々についての伝記が示される。

・こうした世代をまたぐ想起の作業において重要なことは、痕跡の保存や再想像という歴史的な作業だけでなく、家族史を文学的形態、つまり家族史を書き継ぎ、これによって家族史に未来を返却する小説へと変えることである。過ぎ去ったことの想起や想像は、かくして未来と次世代に染め上げられた干渉となる。結局のところ、人は歴史の一部であり、その歴史は別用にも語り継がれうるものだと認識することが重要なのである。（148）